デリー＝サルタナット末期のモスクとローディー支配層

荒　松　雄

1　デリー現存の墓建築とローディー支配層

山本達郎先生古稀記念の論集『東南アジア・インドの社会と文化』（上巻）に、私は、「デリー現存の墓建築とローディー支配層」と題する論考を寄せた。[1] この小論の中で私が考察したのは、十五世紀後半から十六世紀前半にわたる、いわゆるデリー＝サルタナット（The Delhi Sultanate）最後の王朝たるローディー Lūdhi, Lodi 朝の支配層と、今日なおインド共和国の首都ニューデリーとその周辺地域に現存しているサルタナット期の造営と推定される多数の墓建築との関連であった。

ニューデリーの中心部とその周辺、とりわけその南郊一帯の地域には、今日なお、サルタナット時代に造営された

建造物の遺跡が、多数、散在している。現在は、ニューデリー市とくにその南郊の開発・発展のために宅地の中に埋没してしまった格好だが、私が最初にニューデリーに滞在した一九五四―五六年には勿論、一九五九―六〇年及び一九六一―六二年の二回にわたって、東大インド史蹟調査団の一員としてデリー地域で調査に従っていた時も、首都圏南部の地域は、今日と違って数多くのサルタナット及びムガル帝国期に造営された墓建築やモスクを至るところに見出すことが出来たのである。前記の小論では、これらの遺跡の中で、とくにその残存する数が著しく多いと思われたサルタナット末期に属する墓建築について、私が多年抱いてきた疑問の解明を、ローディー朝の権力構造、とりわけスルターンの君主権と支配層の権力意識の問題と関連させつつ考察を試みたものであった。本稿では、まず初めに、その小論の結論を簡単に要約しておきたい。

サルタナット時代に造営されたと推定され、デリー地域に現存する墓建築は、その残存する遺跡の数から見れば、次のようになる。

(1)　第Ⅰ期　五件。　(2)　第Ⅱ期　四十二件。
(3)　第Ⅱ―Ⅲ期　八件。　(4)　第Ⅲ期　八十七件。

なお、ここに記した時代区分は、かつて私たち東大インド史蹟調査団が採用した、デリー＝サルタナットを、「第Ⅰ期」または「初期」、「第Ⅱ期」または「中期」、「第Ⅲ期」または「末期」という三期に分ける方法に従ったものである。[2] これをサルタナット五王朝に当て嵌めると、第Ⅰ期・初期は十三世紀初頭から十四世紀初頭に至る奴隷王朝(the Slave dynasty)とハルジー Khalji 朝、第Ⅱ期・中期は十四世紀から十五世紀初頭にかけてのトゥグルク Tughluq 朝期、そして、第Ⅲ期・末期は、十五世紀前半から十六世紀前半に至るサイイド Saiyid・ローディー両王朝に

わたる期間である。

右の時代区分のうち第Ⅱ—Ⅲ期に分けた墓建築八件を第Ⅱ期の方に加えて数えると、サルタナット初期及び中期（第Ⅰ—Ⅱ期）と、末期（第Ⅲ期）に属すると推定し得る墓建築の数は、夫々、五十五件と八十七件となる。

私はさきに、拙著『インド史におけるイスラム聖廟』（一九七七年刊）の第四部第四章「スーフィー聖者の墓の形態・構造上の問題点」のなかで、サルタナット時代の列柱式墓建築のなかにはスーフィー聖者を葬った墓が相当数見出されること、逆に、スーフィー聖者を葬った墓には列柱式墓建築が相当数あるということを述べた。[3] 従って、さきに記したサルタナット初期及び中期の造営と推定される墓建築と、同じく末期と推定されるもののなかから、仮に二十五件及び三十二件を数える多本柱形式の墓建築を省いてその数を記してみると、次のようになるのである。

(1) 初期及び中期に属すると推定される墓建築　三十件。

(2) 末期に属すると推定される墓建築　五十五件。

このような墓建築の残存する数を調べてみる限りにおいては、二一〇年を越すサルタナット初期及び中期の間に造営されたと推定される墓建築の数に比べて、サルタナット末期、それも主として、七五年の間、四分の三世紀という短期間のローディー朝時代に造営されたと推定される墓建築の方が、その数において、異常に多いということに気付くのである。[4]

私たち調査団は、「墓建築」と言うよりもむしろ「墓地」と呼ぶに相応しい、礼拝壁や囲壁あるいは門を備えている「ガナーティー＝マスジッド」[5] Ganāti-Masjid と言われる特異な建造物についても調査を行い、『デリー』の第Ⅰ巻「遺跡総目録」では、〔G〕の略記号のもとに「墓地」として収録しておいた。このサルタナット期造営の特異な

建造物たるガナーティー＝マスジッドの数について墓建築と同様の時代区分を試みると、次のようになる。すなわち、

(1)　サルタナット初期及び中期に属すると推定し得るもの　十一件。

(2)　サルタナット末期に属すると推定し得るもの　六十一件。

この数字を見ると、ガナーティー＝マスジッド形式の墓地に関する限りは、墓建築の場合以上に、末期造営のものの件数は前・中期のそれを併せた数に比べて著しく多いのである。(6)

サルタナット末期における墓建築及びガナーティー＝マスジッド形式の墓地の造営数の著しい増大という興味ある現象の理由の一つを、私は、さきの拙稿において、ローディー朝支配期におけるアフガン人支配層、とくに貴族勢力とスルターンとの関係の特異性に求めた。詳しくは前記拙稿を参照して頂きたいが、(7)今ここに、その要点だけを記すと、ほぼ次の通りである。

いわゆる奴隷王朝、ハルジー及びトゥグルク朝などのトルコ系スルターンを頂点に頂くサルタナット体制下では、スルターンの権威は極めて強く、君主権に対する貴族の認識には、いわば絶対的なものがあった。だから、同じ民族に属するトルコ系貴族ばかりでなく、他の異民族ムスリムあるいはインド人からの改宗ムスリムの支配層も、多かれ少かれ、君主の絶対権力に対するトルコ人的な認識、あるいは現実の場におけるスルターンと貴族層との関係から、生前は勿論その死後において、自己やその一族郎党の者の墓や、関係する他の支配層に属する者の墓を、容易には構築することが出来なかったものと思われる。とくに、サルタナット初期の墓建築で現存するものが極めて少数であり、残存するものもその大半がスルターンかその一族の者の墓と推定されることは、こうした推論を裏付けるものである。

中期の前半すなわちトゥグルク朝前期についても、強大な君主権の下で、ほぼ同じことが指摘出来る。ただ、中期

の後半に入りスルターン＝フィーローズ＝シャー Sulṭān Fīrūz Shāh の治世になると、中小の墓建築の数が若干増え、スルターンとその一族以外の支配層あるいは聖者の墓が、相当数、造営されたことが判る。しかし、これは、このスルターンの都市造営や水利施設などの公共工事やさまざまな建造物造営を含む社会政策や特異な個人的嗜好と、それに対応する一部貴族の間に見られた建築ブームとも言えるような傾向と風潮との結果である。それにも拘らず、ローディー朝時代の墓建築の数の増加は、その建造物の規模の増大という現象をともないながら、スルターン＝フィーローズ＝シャーの場合をはるかに凌ぐものさえあったのである。

こうした特異な現象の理由の一端を、私は、トルコ系支配層の権力構造、とくにスルターンを絶対視する貴族勢力の姿勢とは著しく異なる、アフガン人支配層の権力関係の中に見出したのである。

アフガン人のサルタナット支配体制に見られる一つの特徴は、ローディー体制下の支配層を形成していたアフガン諸部族の間に一様に見られた、部族間の相互依存関係と、その基盤として窺える部族間相互の自主独立を尊重する権力関係とであった。

勿論、アフガン人たるローディー朝の三人のスルターン、すなわち初代のバハロール＝シャー Bahlūl Shāh と第二・三代のスィカンダル＝シャー Sikandar Shāh とイブラーヒーム＝ローディー Ibrāhīm Lūdhī とでは、最高権力者として、彼の支配下に置かれたアフガン人族長や貴族層に対する姿勢において相当の差はあった。

本稿では改めて詳しくは述べないが、私のさきの論考でも、先学の研究成果を利用しつつ、例えばカースィム＝フィリシタ Qāsim Hindūshāh Firishtah の史書や、自らアフガン人たるアッバース＝ハーン＝サルワーニー Abbās Khān Sarwānī の『ダーウードの歴史』(*Tārīkh-e Dā'ūdī*) の叙述、アフマド＝ヤードガール Aḥmad Yādgār の

『アフガンのスルターンたちの歴史』(*Tārīkh-e Salāṭīn-e Afāgīnah*)、及び『ハーン＝ジャハーン＝ローディーの歴史』(*Tārīkh-e Khān Jahān Lūdhī*) の著者ニーマットゥッラーの叙述など、同時代乃至はムガル前期の文献史料の内容から、以上の事柄についての権力関係の特徴を、かなりの程度、窺い知ることが出来るのである。

詳しくは前掲の拙稿に譲るとして[8]、スルターン＝バハロールは、奴隷王朝のバルバン、あるいはアラーウッディーン＝ハルジー 'Alā' al-Dīn Khaljī やムハンマド＝ビン＝トゥグルク Muḥammad bin Tughluq のような強大な専制君主とは全く対蹠的な首長として行動し、手中に入れたサルタナット体制を、「諸部族の間の一種の連合体」という風に考えていたと言えるのである[9]。R・P・トゥリパティ R. P. Tripathi は、バハロール＝シャーは「スルターンの犠牲において貴族たちの権力と威信とを高める」役割を果したと述べ、さらに「バハロールは、よく見たとしても、せいぜい、アフガーン諸部族のチーフ＝リーダーに過ぎず、その王国のすべての人民の王ではなかった」と記している[10]。

アフガン王国の貴族たちの力を抑え、スルターンの権威を高めることに努めた第二代のスィカンダル＝シャーも、実際の政治の場でアフガン諸部族の首長たちを前にしては慎重に振舞わざるを得なかった。フィリンタも記しているように、彼もまた、「偉大な首長たち (huzūr-e akābir) の前では、王座の上に坐らなかった」し、彼らを受け入れる時には自分も馬から下りて迎えたという[11]。スィカンダル自身、その登極の前後から治世の前半にかけては、その体制の内外に様々な難問を抱えていた[12]。勿論、彼は、徐々にアフガン部族長や貴族たちの権力や権威を低めるような政策を採っていった。しかし、貴族勢力の増大や、前代からの諸部族の首長の自主独立の関係をその儘認めるのを一応は拒む姿勢を採りながらも、アフガン人部族制が保ち続けてきた伝統的な権力関係に対しては、それを十分に認めて尊

重し、その一方で、徐々にスルターンの権威を強め貴族勢力を抑制するという賢明な政策を採ったと見るべきであろう。しかし、全体としては、やはり、当時のアフガン支配層は、トゥリパティをして言わしめれば、「頭が固く、しかも自由を好む人たちで、王権についての新しい観念に対しては、たやすく自分たちを適応させていくことが出来なかった」のである。(13)

三代目のスルターンとなったイブラーヒームは、前二代の治世において強大な自由を享受していたアフガン人貴族に対して抑圧的な強行策を採るに至った。だが、彼の支配下にあっても、アフガン人の有力支配層や族長間には、依然として部族間の自主・割拠主義的な意識があり、相互の間にはつねに対立関係が存在していたことは指摘出来る。結局、ローディー支配を消滅される要因となったバーブルに対する屈伏が、アフガン体制下に存続していた特異な部族的心情とそれに基づく支配層の間の権力党争との結果であることは、周知の事柄と言えよう。

このような、ローディー朝支配下、とくに前二代のスルターンの治世で見られたアフガン人貴族と王権との特異な関係、部族間の自主独立的意識の存続という事実が、スルターンの墓や少数の有力支配層の墓に十分匹敵し得る、あるいは、時にはそれらをも凌駕する程の大規模な墓建築を次から次へと造営していく習慣を生み出し、デリー諸地域を一種の〈墓の町〉にまでさせる結果を導いた最も大きな原因であると、私は考える。

さて、サルタナット末期の間に、デリー諸地域には、各種の規模と形式とを持つモスクが、相当数、造営されており、今日なお、その多くが遺跡として残存している。勿論、モスクの場合には、前稿で考察した墓とは異なる性格を種々の点で持っていることは言うまでもないし、建造の動機や造営の当事者等においても些か異なる条件を考える必要もある。果して、前稿で考察し、一応の結論として導入したさきの推論がモスクの場合にも当て嵌まるものかどう

か、本稿では、まずそうした問題を掲げて、サルタナット末期に造営されたモスクとローディー支配層との関係を採り、それについて歴史的な考察を加えてみたいと思う。

2　デリーに現存するサルタナット末期造営のモスク

インド史蹟調査団の報告書『デリー』の第I巻「遺跡総目録」では、墓建築〔T〕、墓地〔G〕、水利施設〔W〕、及び、その他の建造物〔O〕の他に、モスク六十一件を採録し、〔M〕の略号を用いた。

これら六十一のモスクの中には、ムスリムのイードの礼拝に用いるイードガーIdgāhも含まれており、また、モスクかどうか正確には判断し難い建造物も収録しておいた。これらのモスクを、サルタナットの初期・中期・末期の三期に分類して夫々の数を調べてみると、次の通りである。

(1)　第I期に属すると推定したもの　〔M1〕と〔2〕の二件。

(2)　第II期に属すると推定したもの　〔M3〕から〔M31〕の二十九件、及び〔M56〕のイードガー一件。

(3)　第II－III期に属すると推定したもの　〔M57〕の一件。但し、この建造物については、モスクではない可能性もある。

(4)　第III期に属すると推定したもの　〔M32〕から〔M55〕までの二十四件、並びに〔M58〕から〔M60〕までの三件。

(5)　時期不明のもの　〔M61〕の一件。

右に挙げたモスクの数を夫々の時代区分に従って合計してみると、次のようになる。但し、第Ⅱ—Ⅲ期とした、モスクでない可能性のある建造物一件は、これを第Ⅱ期に含めて考えて私の本稿の立論をより公正なものにし、また、最後に挙げた時期不明のモスク〔M 61〕は、私の推論[14]に基づいて第Ⅰ期にまでさかのぼり得るものとして考え、やや整理してみることにした。その結果は、イードガー一件を含めると、次の如くになる。

(1) 第Ⅰ期　三件。　(2) 第Ⅱ期　三十一件。　(3) 第Ⅲ期　二十七件。

これをサルタナット初期及び中期（第Ⅰ—Ⅱ期）と末期（第Ⅲ期）とに大きく二分してみると、モスクの数は、夫々、次のようになる。

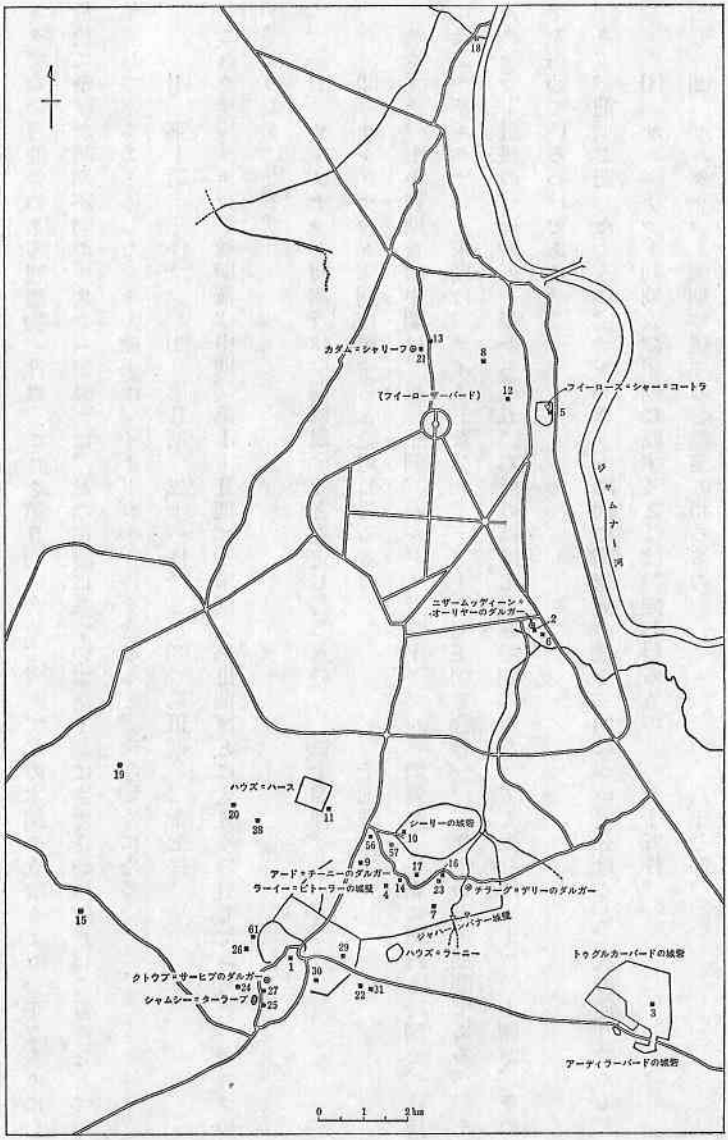
(1) サルタナット初期及び中期に属すると推定し得るもの　三十四件。
(2) サルタナット末期に属すると推定し得るもの　二十七件。

サルタナットの初期及び中期は、奴隷王朝、ハルジー及びトゥグルク両朝の三王朝にあたる時期で、ほぼ二一〇年に及ぶ。サルタナット末期は、サイイド及びローディーの両王朝を含む一一二年にわたる期間であるが、その中、サルタナット最後の、一四五一年から一五二六年のほぼ七十五年間にわたって支配したローディー朝が、その時期の大半を占めているわけである。

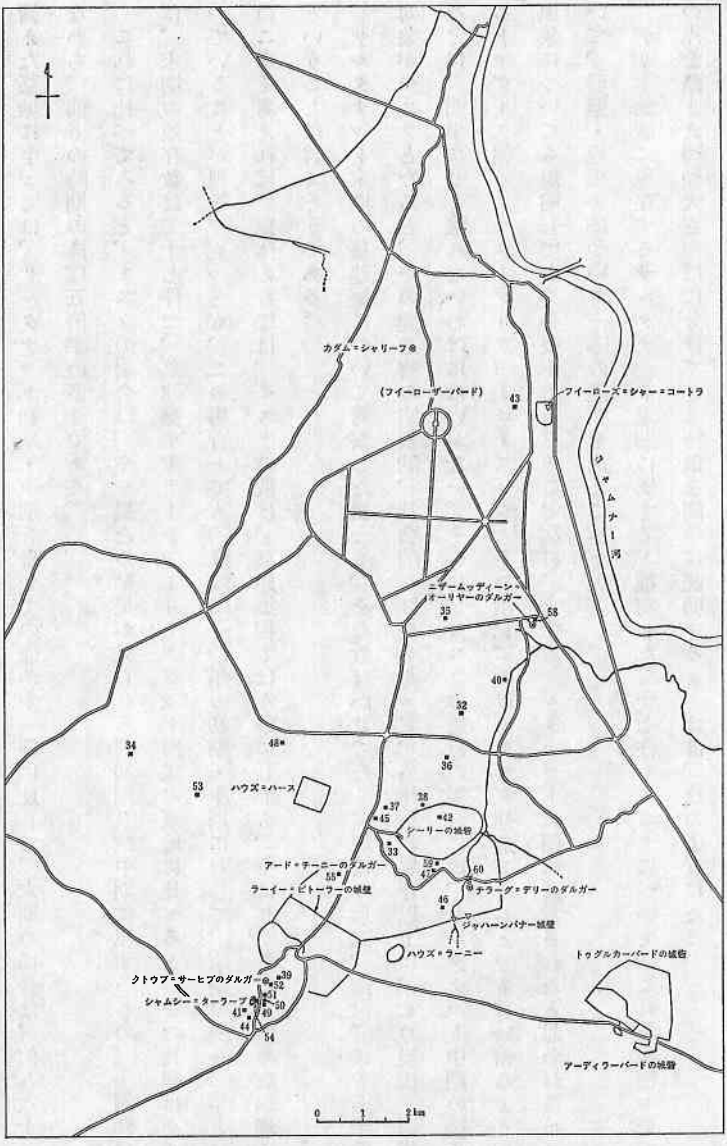
さて、前項で記したように、サルタナット時代の墓建築の数を三期について分けると、次の通りである。

(1) サルタナット初期及び中期に属するとほぼ推定し得るもの　五十五件。
(2) サルタナット末期に属すると推定し得るもの　八十七件。

すなわち、二〇〇年を越すサルタナット初期及び中期に造営された墓建築の方が、その半分の年数に近い一一〇年



挿図 1.　サルタナット初期・中期のモスク〔■印〕の分布図。



挿図 2.　サルタナット末期のモスクの分布図。
（番号を付けない ■ 印は，初期・中期のモスク）

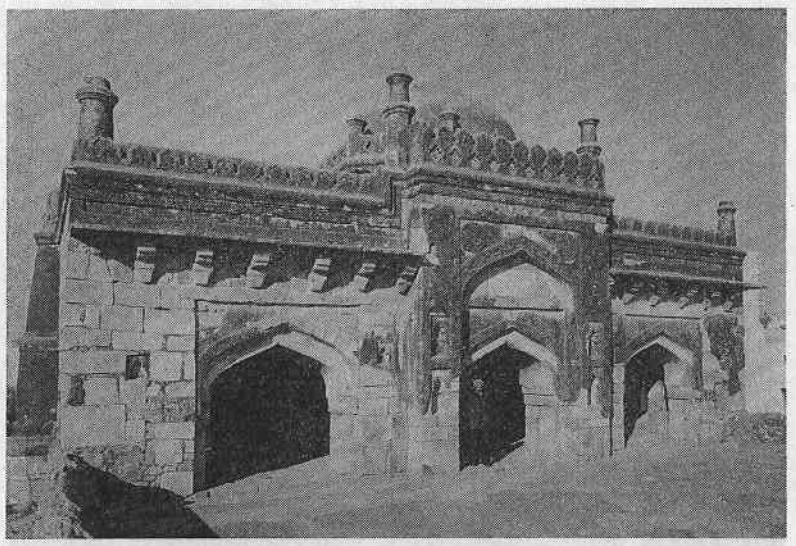
間のサルタナット末期の造営数に比べて著しく少ないことが判る。ガナーティー＝マスジッドと呼ばれる、礼拝堂を備えた墓地に至っては、サルタナット初期・中期を併せての僅か十一件に比して、末期の場合は、何と六十一件、すなわち、前者の時期のほぼ五倍半の多さである。

これに比べてみると、モスクの場合は、やや異なる結果が見られる。初期及び中期に属するもの三十四件に対するに、末期の残存数は二十七件で、墓建築やガナーティー＝マスジッド形式の墓地に比べると、その比率はやや低くなっていることが判る。もっとも、この場合とても、ほぼ二一〇年の初期・中期に対して、末期の一一二年という年数のことを考えれば、総体としては、モスクの数は、墓建築程ではないにしても、やはり、その造営の数が増えているということは言えそうである。

サルタナット末期の墓建築について考察した場合も、その数ばかりでなく、規模や形式、造営者にも若干触れたが、[15] 対象がモスクとなると、その建造物の宗教的、社会的な性格もあって、墓建築の場合以上に、その規模や形態・構造などに、簡単にせよ触れないわけにはいかない。それに、モスクの造営の場合には、サルタナット中期の後半期に当るトゥグルク朝のスルターン＝フィーローズ＝シャーの治世におけるモスク建造ブームとでも言い得るような特異な現象についても説明しておく必要がある。そこで次に、まず、サルタナット末期に造営されたと思われるモスクについて、形態・規模等について一応の説明を加えてみたい。

デリー地域に現存するサルタナット末期に属すると推定した二十七件のモスクについて、これを規模や形態・様式の点を踏まえつつ大ざっぱに分けてその特徴を簡単に説明すると、ほぼ、次のようになる。

(1)　間口が五間のかなりの規模のモスク。室内はアーチで仕切られてはいるが、独立した部屋を五つ持ってい

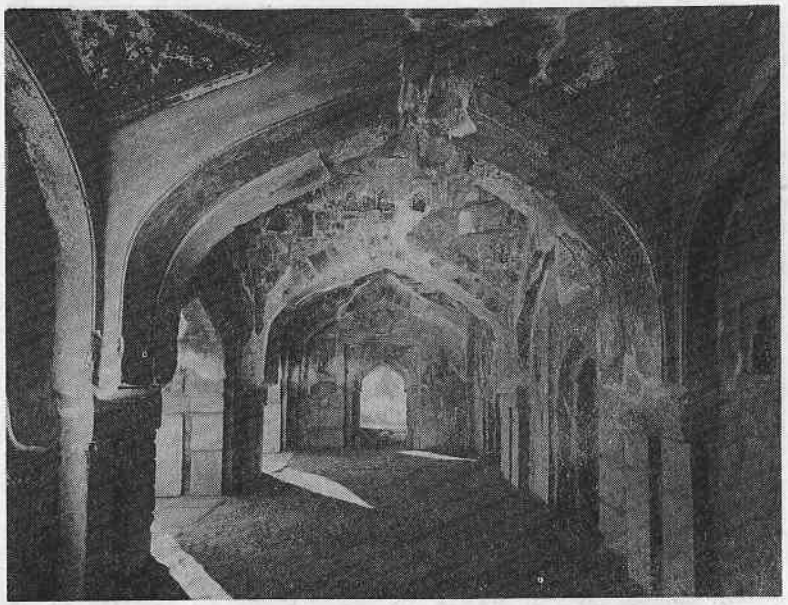


挿図 3.　ニーリー＝マスジッド〔M. 37〕。

るわけではなく、屋上のドームは一乃至は三つ。例えば〔M 32〕〔M 35〕〔M 36〕[16]などであり、また、南北両側に袖室を東に張り出したマフドゥーム＝サーヒブ Makhdūm Sahib のモスクも、これに入れていいだろう。

(2)　礼拝室が三部屋から五部屋であるが、(1)に比べて規模がやや小さい。中央にドームを頂くものもあるが、ドームを上げずに平坦な屋根を持つものもある。これらのモスクは、サルタナット末期のタイプとしては一つの代表的な形態と言える。例えば「ニーリー＝マスジッド」Nīlī Masjid として知られるモスク〔M 37〕はその典型といってよく、独立した部屋というよりは、アーチとスクインチとで区切られた格好である。〔M 34〕、〔M 38〕から〔M 40〕までの三件、〔M 42〕から〔M 47〕までの六件、〔M 52〕から〔M 54〕までの三件のモスク、及び〔M 58〕〔M 60〕などをこの中に入れることが出来よう。

(3)　右の(2)の如き、いわば末期の中型モスクの典型的様式とはやや異なる中型のモスクで、例えば、間口四間で墓墟や囲



挿図 4.　ニーリーニマスジッド〔M. 37〕内部，北より。

壁を持つ〔M 50〕〔M 51〕の二件や、間口は五間で、(2)の型の両端に二つの部屋を付けた格好の〔M 41〕や〔M 48〕などがこれに当る。また、間口六間で、その中央に屋上に登る階段を造っている〔M 49〕のモスクの如きもこれに入れていいであろう。

(4)　破壊著しく、右の中の(2)か(3)かは不明なもの。例えば〔M 57〕〔M 59〕等。

(5)　〔M 55〕として分類したアードチーニーのモスク。それは、我々の報告書『デリー』では、〔G〕の見出しの下に整理した「墓地」の項目の中に入れてもおかしくはないガナーティーニマスジッド形式の構築物である。しかし、浄めの水槽（井戸）や礼拝壁前の礼拝床を備え、明らかにモスクとしての機能を持っているので、とくに〔M〕項に入れたものである。

さて、右に大ざっぱに分類したサルタナット末期の

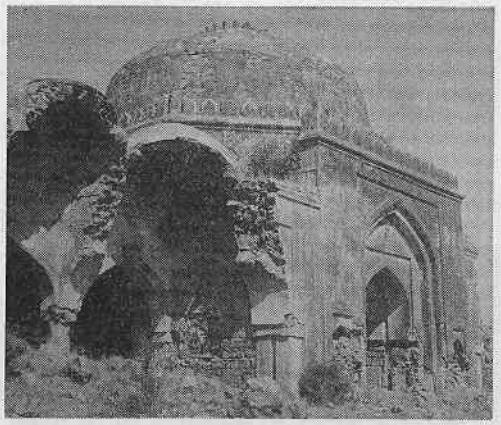
モスクの諸タイプの中で、本稿の論点に関連する特徴乃至は問題点を備えるモスクを幾つか抽出して、その規模と併せて紹介しておこう。

（I）サルタナット末期のモスクとしては比較的規模の大きいもの。

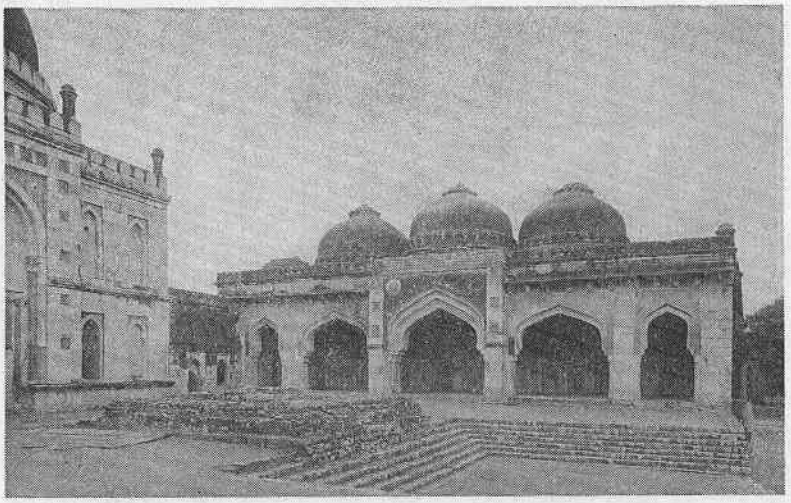
(1) 〔M 32〕のムバーラクブル＝コートラのモスク。[17] 礼拝室が外辺約二〇メートルと九メートルの比較的大型のモスクで、間口五間、奥行き二間で、三つのドームを屋根に乗せており、中央ドームがやや大きくて高い。間口五間の部屋は、通り抜けの形式である。

このモスクは、サイイド朝のスルターン＝ムバーラク＝シャーの墓と推定される八角形の大型墓建築[18]〔T 77〕の近傍のほぼ西北西にあり、その墓を取囲んでいたと推定される囲壁の西壁に接してその西門の直ぐ西に位置しており、恐らくは、サイイド朝時代の造営と推定される。従って、本稿の私の論点の中心たるアフガン人の権力たるローディー朝の時期の建造物としては、以下の行論では省くこととする。

(2) 〔M 34〕の、モラーダーバード＝パハーリー Morādābād Pahārī の北のモスクと呼ばれるもの。[19] 三室を持ち、中央の部屋のみがドームを掲げる様式で、規模も南北二九、東西一五メートルで、かなりの大型である。サルタナット中期（第Ⅱ期）と推定される、二八メ



挿図 5. モラーダーバード＝パハーリーの北のモスク〔M. 34〕。



挿図 6.　バラー＝グンバッド＝マスジッド〔M. 35〕。左に見えるのはバラー＝グンバッド。

ートル×一五メートルのカサーイーワーラー＝グンバッド[20]〔M 19〕に追加建築されたものと考えられる。

このモスクの立つ区域には興味ある建造物が残っており、今も断続的にその一部を見ることが出来る四メートル厚さの囲壁や門[21]などから見て、かなりの地方的権力者か有力貴族が占領していた地域のように思われ、本稿の視点からも、きわめて興味がある。その近くには、巨大なバーオリー[22]〔W 20〕も残っており、宗教上の一中心地であった可能性もある。

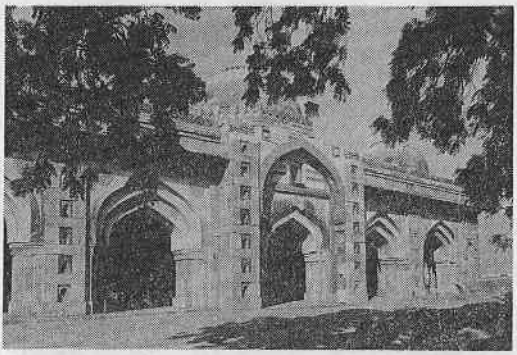
(3)　バラー＝グンバッド＝マスジッド Barā Gumbad Masjid として知られる〔M 35〕の大モスク[23]。内庭は東西約三二メートル、南北約二六メートルあり、その南側にバラー＝グンバッドと呼ばれてきた大きな門がある。内庭の東側にも宿舎に用いられたと思われるモスクとほぼ同規模の建造物を持つ一大コンプレックスである。

モスクそのものは、外辺約二七メートルと七メートル余の長方形の大型構築物で、間口五間の五室の中、中央三室のみがドームを乗せている。モスク南端の部屋の西壁上部に、九

〇〇年（一四九四年）とスィカンダル＝シャーの名を記す碑文が残っている。[24]

このモスクとその碑文については、この構築物のほぼ北側に残存するシーシュ＝グンバッド Shish Gumbad と呼ばれてきた墓建築[25]〔T 51〕をスルターン＝バハロール＝ローディーの墓と推定するという独自の見解を発表したサイモン＝ディグビー Simion Digby の論考に、従来の定説とは異なる興味ある見解が紹介されている。[26]それについては、次項で触れたい（後述二二頁以下）。

(4) モートゥ＝キ＝マスジッド Moth ki Masjid の名でデリー市民に親しまれてきた大型のモスク[27]〔M 36〕。



挿図 7. モートゥ＝キ＝マスジッド〔M. 36〕。

礼拝室は五つの部屋から成り、中央及び南北両端の部屋はドームを乗せ、他の二部屋は花弁形の天井を持ち、建物の背後の両端には二層のバルコニーを有する特異なモスクである。囲壁を持つ前庭には、東側に門があり、また北東及び南東隅にはチャハトリを備えている。大理石と赤砂岩とを巧みに組合せて色彩の妙を強調し、また彫刻文様も砂岩の機能を生かして独特の美しさを持つ。ASIの報告書は、礼拝室の規模を南北三七メートル余と東西八メートル余と計っている。

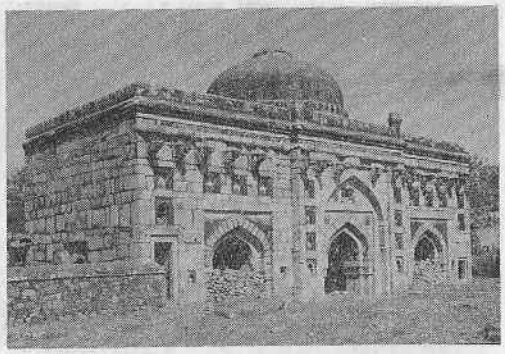
(5) マフドゥーム＝サーヒブ Makhdūm Sāḥib のモスクと呼ばれる[28]〔M 33〕は、七つの部屋から成る礼拝室と、南北両端から東へ張り出している夫々二部屋の袖室の部屋から成る特異な形式を持つ構築物であり、主室の上に三つのドームを掲げている。

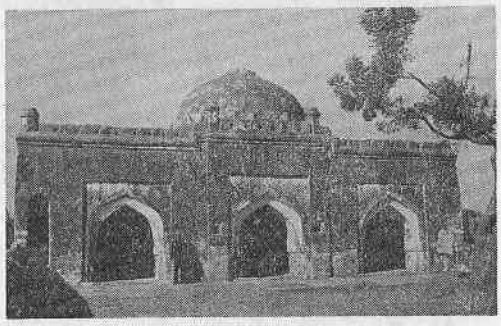
このモスクの内庭とその周辺には、今日幾つかの墓が残っており、東側にはドームを頂く十二本柱の墓建築[29]〔T 108〕が立っている。その北側の墓石の一つが、マフドゥーム＝サーヒブ（日本語では「御聖人様」といった程の意味の尊称）のものとされ、聖者の墓所として崇敬の対象とされてきた。[30]

（II）中型乃至は小型のモスク。

(1) ニーリー＝マスジッド Nīlī Masjid として知られるモスク〔M 37〕[31]および、その類似のモスク。ニーリー＝マスジッドは、一六、四×六、二メートルで三室から成り、ドームは中央部に一つだけの中型モスクで、さきにも記したように（本論文、挿図3・4を参照）、ローディー期時代の中型モスクの典型の一つと見ることが出来るもので、内部はアーチとスクインチで仕切られた三部屋が通しになっている構造である。九一一AH年（一五〇五年）とスィカンダル＝シャーの名を記す大理石の碑文[32]を東面上部に掲げているので、歴史上重要な資料的価値を有する建造物である。

〔M 38〕の、地方的にはムハンマディーワーリー＝マスジッド Muḥammadīwālī Masjid として知られていた





挿図 8.（上）ムハンマディーワーリー＝マスジッド〔M. 38〕。**挿図 9.**（下）シェイフプルのモスク〔M. 47〕。

モスク[33]で、前記のニーリー＝マスジッド〔M37〕とその形態・構造において著しく似通っている。中央にドームを掲げている。

〔M42〕のモスク[34]は、崩壊著しいものがあったが、中央にドームを乗せている点も併せて、このニーリー＝マスジッド型と見てよい。

また、われわれがシェイプル Shaikhpur のモスクと名付けた〔M47〕は、外部の壁面の装飾で著しく感じを異にするが、基本的には同構造である[35]。

(2) ラージョーン＝キ＝バーイーン Rājūn kī Ba'aīn のモスク〔M39〕[36]、およびその類似型。

ラージョーン＝キ＝バーイーンのモスク〔M39〕は、前項(1)のニーリー＝マスジッド型の、いわばドームを持たない形式のものといってよく、様々な点で似通う構造・様式を備えている。夫々に入口を持つ三部屋は通しで、アーチとスクインチとによって仕切られている。但し、屋根にはドームを掲げず、平坦のままに止めている点で特徴がある。

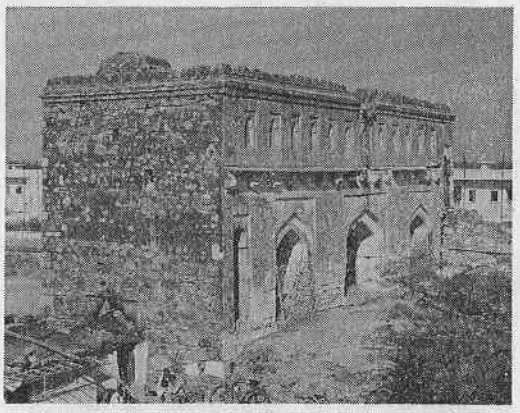
同形のものとしては、〔M45〕のモスク[37]をはじめ、ユースフ＝カッタール Yūsuf Qattal のモスク〔M46〕[38]をはじめとして、バスティー Basti のモスクとして知られる〔M40〕[39]、〔M43〕と〔M44〕の二件のモスク[40]などがある。

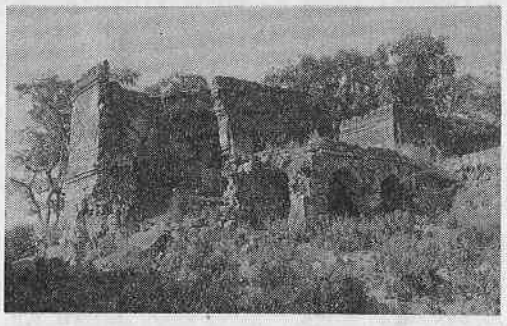
〔M52〕〔M53〕の二件もほぼ同型であるが、かなり小型である[41]。〔M54〕は、ほぼ同型であったと見られるが、崩壊著しく[42]、ドームがあったかどうか不明であるが、一応、ここに入れておく。

(3) 長方形で基本的には前項のタイプと似ているが、部屋数が多い中型のモスク。

〔M41〕のマフドゥーム＝サマーウッディーン Makhdūm Samā 'al-Dīn のモスク。[43] 屋根は平坦で、前項に分類した中型モスクと類似するが、部屋数は七つで、その延長型と見てよい。

その他には、ドーム三つ、五部屋の〔M48〕[44]、屋上へ通じる階段を挾んで南北夫々に三部屋を持ち屋根が平坦な〔M49〕[45]、また、四部屋で平屋根を持ち基壇に乗る〔M50〕[46]〔M51〕[47]等がある。





挿図 10.（上）バスティーのモスク〔M. 40〕。
挿図 11.（下）モスク〔M. 50〕。

(III) 特異なタイプ。

さきに紹介した〔M55〕のアドチーニーのモスク[48]がある。これは前述したように（一四頁）、七つのミヒラーグを持つガナーティー＝マスジッド形式を持つものだが、我々はモスクに分類した。東門上部に、九一五AH年（一五〇九年）の年次とスィカンダル＝ローディーの名を持つ歴史碑文[49]が残存している点で、重要な遺跡である。

3　モスクの建設者とアフガン支配層

さて、右にサルタナット末期に属する、さまざまなモスクの形式と規模とについて簡単に分類して説明を加えてきたが、ここでは、それらのモスクが如何なる人物によって建設されたものか、判明する限りにおいて述べてみたい。

（I）比較的規模の大きいモスクについて。

(1)〔M32〕のムバーラクブル＝コートラのモスク。　このモスクについては、さきに紹介したような環境（前述一五頁）の中に建てられていることから、恐らくは、サイイド朝時代の造営の可能性があり、それも、あるいは宮廷所在地として造営されかけたムバーラカーバード[50] Mubārakābad の内域にあったという可能性もある。もしそのように考えるときは、このモスクがスルターンの権力によって造営されたと推定することも出来よう。

(2)　モラーダーバード＝パハーリーの北のモスク〔M34〕。　すでに述べたように（一五―一六頁）、本稿の視点からすれば、このモスクの建立された環境はきわめて興味がある。恐らくはトゥグルク朝後期からサルタナット末期に至るまで、有力貴族か地方的権力者の土地内に造営されたモスク、あるいは宗教者と関連するモスクと推定してもいいのではなかろうか。ただ今日では、如何なる歴史碑文も遺されていない。

(3)　バラー＝グンバッド＝マスジッド〔M35〕。　これは、さきに紹介したように、近年に論議を呼んでいる建造物である（一六―一七頁）。モスク南端の部屋の西壁上部の問題の碑文は、九〇〇AH年（一四九四年）

とスィカンダル＝シャーの名を残しているが、別に不明の人物の名が刻まれている。

ザファル＝ハサン Maulana Zafar Hasan は、碑文調査報告[51]（1919—12）で、この人物の名を「アブー＝アムジャドとミール＝ジャハーン」（Abū Amjad wa Mīr Jahān?）と読んでいる。一方、十八世紀にこの碑文を紹介したカニンガム A. Cunningham は、「亡きムガル＝アブー＝アムジャドとムハンマド＝ハッバーンの息子たち」（the sons of the deceased Mughal Abu Amjad and Muhammad Habban）と紹介しており[52]、ザファル＝ハサンも、ASIの『リスト』（1922）の方では、カニンガムを受けてか、「ムガル＝アブー＝アフマド」（Mughal Abu Ahmad）と読みかえている[53]。

サイモン＝ディグビーの言うように[54]、ローディー朝時代には、アブー＝アムジャド、ムガル＝アブー＝アムジャド、ムハンマド＝ハッバーンあるいはミール＝ジャハーンなどの名を有する人物は見当らないようである。ディグビーは、ザファル＝ハサン及びカニンガムの読み方に批判的であり、結局、固有名詞としての人名は挙げずに終っている。

ただ、このモスクの碑文の中の「ジャーミ＝マスジッド（Masjid-e jāmi'）の建物の中」（カニンガム及びザファル＝ハサン）と「この公共モスク[55]（the congregational mosque）の建物の中」という読み方は、三人ともに同じである。これらのことから推しても、この大規模なバラー＝グンバッド＝コンプレックスは、スィカンダル＝シャー時代の公共モスクであった可能性も多い。ただし、もしディグビーの読み方を採れば、その造営者が、スルターンがその代行者である可能性もある（もっとも、ディグビーの本旨は、シーシュ＝グンバッドをスルターン＝バハロール＝シャーの墓とするものであり、このモスクを含むコンプレックスを、その従属的

建造物と考えるのである)。もし、カニンガムあるいはザファル＝ハサンのように、何らか別の人物により、このモスクが新たに拡張されたものと解するならば、その建設者は、やはり、ローディー貴族の一人乃至は複数の人物と見るのが当然であろう。

以上を要約すれば、この巨大な門を有するモスクの造営者は、スィカンダル＝ローディーがその代行者、あるいはアフガン人支配層の何れかと考えるのが妥当であろう。「ムガル」と読むのは、ディグビーが解説しているように、無理のように思われる。[56]

(4) モートゥ＝キ＝マスジッド〔M 36〕。　サルタナット時代のモスクとしては稀に見るこの美麗な建造物には、今日如何なる歴史碑文も残存していない。しかし、このモスク建立については、アウラングゼーブ治世四〇年に完成を見たとされる『フラーサットゥル＝タワーリーフ』*Khulāṣat al-Tawārīkh*[57] の叙述から、スィカンダル＝シャーの大臣の一人で、サイイド出身のミヤーン＝ボイヤなる人物が造ったという話を伝えている。同書によると、[58] ジャーミ＝マスジッドの中で (dar Masjid-e jāmi') 一粒のモートゥ mūth を見て拾い、ミヤーン＝ボーイヤ Miyan Bhūyah の手に渡した。スルターンの手が触れたそのモートゥの穀粒を彼の家の庭園 (bāghchah) に播き、結局、大国を手にすることが出来たので、そのことをスルターンに報告し、「デリーの町に一つのモスク」を建立させたというのである。勿論、この史書は一一〇七AH年（一六九五―六年）に完成したものとされているから、[59] この話の真偽は不明としなければなるまい。

だが、このモスクの名称の由来として伝えられてきた、ミールによる建設という伝承は、本稿の視点からは興味がある。というのは、このモスクは、石材や様式、色彩感覚などの諸点でサルタナット建築史上でも目立

つほどの建造物であり、規模や形式、その凝った造りからして、恐らくはサルタナット末期の支配層の造営にかかるものと推定されるからである。

(5)　その他に、さきに紹介したマフドゥーム＝サーヒブなる聖者と思われる人物の墓の傍に中規模のモスク〔M 33〕があるが（前述一七―一八頁）、この造営の主も全く判らない。恐らくは、支配層の一人が建設者であると推定してまず間違いないと思う。

(II)　中・小規模のモスクについて。

さきに紹介したサルタナット末期に属すると思われる中・小規模のモスクの中、歴史碑文の存在からその造営年代と建設者を推定し得るもの、あるいは関連附属の建造物の碑文によってそれが可能なものについて、先ず紹介し、若干の考察を加えてみたい。

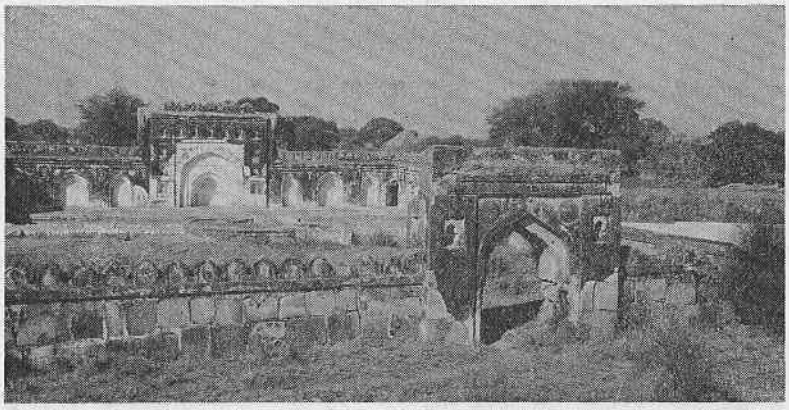
(1)　ニーリー＝マスジッド〔M 37〕　さきに紹介した歴史碑文は、その建立の年次を九一一AH年（一五〇五年）とし、スィカンダル＝シャーの治世、ハーネ＝アーザム＝マスナデ＝アーリー＝ハワース＝ハーンの管轄市政下（ba-'amal wa shahrdārī-e Khān-e ā'zam Masnad-e 'Ālī Khawāṣkhān）としている。さらに、「この建物の造営者」（bāniyat-e 'imārat）として、「ハワース＝ハーンの子の……ミヤーン＝ファトゥフ＝ハーン……の乳母（dāyah）たるカスンビール（Kasunbhīl）」と記している。[60] この「造営者」（bāniyat）は bānī の女性形で、dāyah という女性を示す単語に対応している。dāyah とは、スタインガスの辞書などでは "nurse, foster-mother, midwife" などの訳語があるが、ザファル＝ハサンの二つの報告も "nurse" と訳している。乳母乃至は義母がよかろうと思う。

この中・小規模のモスクで直接に歴史碑文をその建物に遺している例は他には見られない。間接的には、例えば〔M 39〕のラージョーン＝キ＝バーイーンのモスクで、その名で親しまれてきたローディー朝期のバオリー〔W 26〕と墓〔T 103〕と関連して造られた兄のモスクは、墓の前面に残る歴史碑文によってその年次と造営者とをほぼ推定できる。それは、九一二AH年（一五〇六年）の年次及びスィカンダル＝シャーの名とともに、このグンバッドの造営者を「ダウラト＝ハーン……」(Daulat Khān……) としている。[61] これから、このモスクの造営者についても、あるいはこれと同人物と推定出来ないことはない。

また、マフドゥーム＝サマーウッディーンのモスク〔M 41〕も、モスクそのものに歴史碑文はないが、南に接して建てられたマフドゥーム＝サマーウッディーンのものと伝えられる墓〔T 105〕には、九〇一AH年（一四九五—九六年）の年次を記す歴史碑文があるが、これは十九世紀末葉のものである。[62]

(III) ガナーティー＝マスジッド形式のモスク。

最後に、特異なガナーティー＝マスジッドの形式を持つアードチーニーのモスク〔M 55〕は、その東門の上部に横長に掲げられた碑文によって、スィカンダル＝シャーの治世のイスラム法学者として知られていたムルターン近傍のトゥランバ出身のイラフダード (Ilahdād-e Tulanbī) の子のミーヤーン＝アブドゥッラー (Miyān 'Abd Allāh) としている。[63] 彼の称号として、碑文は「マリクル＝ウマラー、タージュル＝スラハー」(Malik al-'Umalā Tāj al-sulahā) としているので、彼も同じく法学者だったと思われる。このモスクのある地は、サルタナット初期の著名な聖者シェイフ＝ナジーブッディーン＝ムタワッキル Shaikh Najīb al-Dīn Mutawakkil とその一族その他の墓所として著名なところから、その縁りの地にこのモスクを造営したものと思われる。[64] ロ



挿図 12.　アードチーニーのモスク〔M. 55〕，東より。

ーディー朝時代のウラマーによって建てられたことが推定し得る貴重なモスクである。

以上のように、サルタナット時代末期に造営されたと推定されるモスクの造営者については、ムバーラクプール＝コートラのモスク〔M 32〕がサイイド朝に属する可能性があると考えられる余地があるほかは、歴史碑文のある遺跡を中心に比較検討すると、ほぼ、ローディー朝時代の造営と見てよいであろう。それも、第二代スルターンたるスィカンダル＝シャー＝ローディーの治世に建てられたものが多いように思われる。

その造営者については、サイモン＝ディグビー氏の異説提起によりスルターン＝スィカンダルの命によって建てられた可能性のあるバラー＝グンバッド＝マスジッドを除けば、少くとも歴史碑文を残すモスクは、何れも同スルターンの治世に、支配層によって造営されたものと推定してよさそうである。もっとも、中には、ニーリー＝マスジッド〔M 37〕のように、支配層と関わりを持つ女性によって造営されたと思われるものもある。

モートゥ＝キ＝マスジッド〔M 36〕のように、ムガル中期になってからその造営にまつわる話が伝えられたような美麗なモスクもあるが、そ

れとても、ローディー朝時代の貴族の造営を示唆するものである。

ただ、本稿で紹介したようなローディー朝を中心とするサルタナット末期のモスクのなかには、アードチーニーのモスク〔M55〕のように、当代のウラマーによって造営されたと推定されるものもあり、すでに述べたように（二一頁参照）、聖者の墓に付属して造営されたと思われる中型のモスクの存在も類推されるのである。

ただ、それらの幾つかの場合を除けば、残存するモスクは、ローディー朝時代、とくにスィカンダル＝シャーの治世を中心として当代の貴族支配層によって造営されたものがその大部分を占めるものであろうという推定は、十分に成り立ち得るものと思われるのである。

そうした推定に立てば、拙稿「デリー現存の墓建築とローディー支配層」で紹介した私見、すなわち、本稿の第一節で要約したように、ローディー朝期特有の多数の墓建築建立という事実を解く鍵として考えられる、ローディー朝支配下のアフガン支配層に見られた特異な権力関係と自主独立的部族意識が、このモスクの造営の場合にも影響しているのではないかと考えられはしないだろうか。もっとも、モスクの場合には、当代の墓建築の造営件数が著しく多かった事実に対して、それ程の数の増大を結果してはいない。そのことは、本稿の第一節で挙げた数字、すなわち、サルタナット初期及び中期に属すると推定し得る墓建築三十件に対して末期造営のもの五十五件というのに比して、モスクの場合には、夫々、三十三件に対するに二十八件となり、その数がやや減少していることからも判る。従って、墓建築とモスクの場合に何故このように差が出るのかということを説明する必要があると思う。

私見では、それは二つの問題について予め考察することが必要と思う。その第一は、モスクと墓建築との、建造物としての性格、とりわけ宗教的、社会的、さらには政治的意味の違いという事柄である。第二には、サルタナット中

期の後半、すなわちスルターン＝フィーローズ＝シャー＝トゥグルクの治世に見られた公共事業及び建造物造営の一種のブームが後代に与えた影響である。従って、次には、この二つの側面から、私が提起した問題の背景を考察しつつ、本稿の結論について記していきたい。

4　モスクの造営とローディー支配層

ローディー朝を主とするサルタナット末期に様々な規模のモスクが造営されたが、それが、数において同時代の墓建築やガナーティー＝マスジッドを含む墓地の数に比して少いのは、モスクと墓建築の建造物としての性格から見て、けだし、当然のことのように思われる。

墓は、イスラム教徒が必ず営むものであり、墓建築は、死者及びその遺族の社会的地位を始めとする様々な理由から、時に大規模な建造物として建立された。少くとも、墓、墓地、あるいは墓建築は、ムスリムにとって、いわば必須の構築物、建造物である。そして、権力者は、死者の、そして自らの墓を、時には豪華壮大なものにまで具現した。

しかし、モスクの場合は、その建立の理由が、始めから異なる。モスクの本来の目的は、マッカに対する礼拝の場を作り出すことにあり、ムスリムの宗教儀礼にとって、たしかに必須の建造物である。だが、多かれ少かれ、モスクは、社会的性格を持ち、通常は個人的な性格よりも公共的性格を持つ建造物である。ジャーマ＝マスジッド、すなわち金曜の安息日に集団で礼拝を行う公共モスク[65]は、その象徴であった。

サルタナット時代のデリーにおいても、この種の公共モスクは、最初の権力であったいわゆる奴隷王朝の時代から

諸王朝期を通じて壮大な建造物として営まれてきた。今日「クトゥブのモスク」(the Qutb Mosque) としてデリーの観光名所となっている大建造物[66]〔M 1〕は、奴隷王朝とハルジー朝を通じ、さらに後代に至るまで、デリーの支配層や民衆にとってのジャーマ＝マスジッドとしての役割を果してきた。ギヤースッディーン＝トゥグルク (Ghiyāth al-Dīn Tughluq によって建てられた巨大なジャーマ＝マスジッド〔M 3〕は、今は殆ど崩壊し去り、主礼拝堂の西壁の一部を残すのみの全くの廃墟に過ぎないが、トゥグルカーバード Tughluqābād の巨大な城市の廃墟の中に残っているその遺構から推すと、たとえ未完に終った可能性はあるにもせよ、広大な規模を持つものであった。[67]

トゥグルク朝後期のスルターン＝フィーローズ＝シャーがデリーの各地にジャーマ＝マスジッド及びそれに匹敵する大規模なモスクを造営したことは、サルタナット建築史上著名なことであり、最近では、月輪時房氏が、それについて紹介している。[68]

このようなジャーマ＝マスジッドの造営は、本来、デリーのスルターンが造営すべき性格のものであり、実際、トゥグルク朝前期までは、歴代の強力な、または敬虔なる信仰心を持つスルターンの命令によって造営されたものと見て、ほぼ誤りあるまい。上に挙げた二つのモスクと、シェイフ＝ニザームッディーン＝オーリヤー Shaikh Nizām al-Dīn Auliyā' のダルガー dargāh すなわち聖廟の内陣に立つジャマート＝ハーナ＝マスジッド[69] Jamā'at Khāna Masjid〔M 2〕及び旧ベーガムプール Begampur 村に残っている壮大なバイロンを主室前面に持つ巨大なベーガムプーリー＝マスジッド[70] Begampuri Masjid〔M 4〕は、何れもハルジー＝・トゥグルク両朝の首都デリーにおけるジャーマ＝マスジッドの一つだったと推定され、恐らくは、夫々スルターン＝アラーウッディーンとその親族、及びスルターン＝ムハンマド＝シャー＝トゥグルクによって造営されたものと推定される。

今日残存する遺跡に関する限り、サルタナット初期から中期の前半、つまり奴隷王朝からハルジー朝を経てトゥグルク朝前半の時代に至る約一五〇年にわたる期間に造営されたモスクの遺跡が、以上に記した四つの建造物を除いて今日他に全く見られないという事実は、本稿の視点からきわめて興味がある事柄と言える。言葉を換えれば、モスクとしては、この時期までのデリーには、スルターンの権力によって、公共的性格を持つ巨大なジャーマ＝マスジッドだけが、その権力の中心拠点たる宮廷所在地あるいはその近傍に[71]造営されたという事実を示唆しているからである。遺跡によって見る限り、サルタナット初期及び中期の前半までに至る時期には、本稿で紹介したような中小規模のモスクは、何一つ残存していないのである。[72]

スルターン＝フィーローズ＝シャーの治世に入ると、デリーにおけるモスク造営の歴史は劃期的な転換を示していく。彼の時代には、新都フィーローザーバード Fīrūzābād の造営[73]とともに、建造物造営や公共工事が著しく振興を見たが、その結果、少くとも八件に上るジャーマ＝マスジッド乃至はそれと公共的性格を同じくする大規模なモスクが造営され、さらに中小規模のモスクが、サルタナット史上初めて造営されるようになったのである。それらについては、ここに一々紹介する紙数はないが、前記の月輪時房氏の論文に、現存するモスクとの比定も含めて当時の文献による名称が列挙紹介されているので、参照していただきたい。[74]

これらトゥグルク朝後期のフィーローズ＝シャーの治世に造営されたジャーマ＝マスジッド及びそれに準じる規模の大規模のモスクは、すべてが、必ずしもスルターン自身によって造営されたものとは思われない。そのことは、例えば、フィーローズ治世の歴史家シャムセ＝スィラージュ＝アァフィーフ Shams-e Sirāj 'Āfif の著書『フィーローズ＝シャーの歴史』*Tārīkh-e Fīrūz Shāhī* に見えるモスクの名称によってみても明らかである。[75]その「八つのジャー

マ＝マスジッド」(hasht masjid-e jāmi') の中には、例えば「ハーン＝ジャハーンのマスジッド」(masjid-e Khān Jahān) とか「ナーイブ＝バールバクのマスジッド」(masjid-e Nāib Bārbak)・「マリク＝ニザームル＝ムルクのマスジッド」(masjid-e Malik Niẓām al-Mulk) というように、高官名を付けた大モスクの名も見えるのである。(76)

このように、同時代の史書に記載されたにモスクの名称から推すと、これらの大モスクの造営者は、少くとも直接の建設者としては、スルターン自身でなく、その有力なる側近やフィーローズ体制下の有力貴族が考えられるのである。もっとも、フィーローズ＝シャー自身によって書かれたとされる同時代の『フィーローズ＝シャーの勝利』*Futūḥāt-e Firūz Shāhī* には、例えば、神が彼に与え給うた贈物の中の一つは公共的な建造物を建てることであったと言ったあとで、「かくて私は、モスクや学校やハーンカーを建てた (basī masājid wa madāris wa khwanq binā kardim)」云々と記している。(77) また、同時代のシャムセ＝スィラージュ＝アァフィーフの『フィーローズ＝シャーの歴史』にも、「スルターン＝フィーローズ＝シャーが建てた様々な建造物について」(dar 'imārathāī-e gūn-a-gūn kih Sulṭān Fīrūz Shāh kard) という見出しの下に、第十一章には、「スルターン＝フィーローズは、……都市、城砦、宮廷、堰堤、モスク、墓等の多数造営を命じた」(az qism shahrhā wa ḥisārhā wa kūshakhā wa bandarhā wa masājidhā wa mqābirhā bisiyār wa bīshmār bana farmūd) と述べられているのである。(78) しかし、こうした叙述法は屢々あることで、スルターン自身が建てたという風に書いてあるとしても、それは、彼の治世に多くのモスクや墓、学校やハーンカーが、スルターンによって造営されたのではなく、前述したように、実際には、有力貴族によって建てられていると考えていいのである。ただ、そうしたことがブーム的現象として行われた事実の背景には、主権者たるスルターン＝フィーローズの宗教施設造営に対する熱意が、当然、あったからであり、恐らく、そうした雰囲

気の中で、有力貴族は、いわば競って、モスクやハーンカー、マドラッサなどの宗教施設を造営して、公共工事や建造物造営を神への奉仕と強く考えたスルターンの意に沿うべく、努力したものと思われる。トゥグルク後期、とくにスルターン＝フィーローズ＝シャーの治世にデリー地域に大規模なモスクが少くとも八つ以上も造営されたという事実も、造営者とその意図を考えると、右のように説明されて然るべきだと、私は考える。

ところで、スルターン＝フィーローズ＝シャーの治世以降には、遺跡としては少くともデリー地域にはそれ以前に全く見られない中、小規模のモスクが相当数建てられている。このことは、モスク造営史上きわめて興味あり、且つ重要な事柄である。これらの中小モスクについては、私たちも報告書『デリー』の「遺跡総目録」の中で、第Ⅱ期に属するものとして、ハウズ＝ハースのモスク〔M 11〕から旧サイイドゥル＝アジャーイブ聚落の西端に残るモスク〔M 31〕まで、総件二十一件を採録し、第Ⅱ期すなわちサルタナット中期の造営と推定している。[79] さらに、モスクと並んで特異な礼拝施設たるイードガーとして、イクバール＝ハーン Iqbāl Khān のイードガー〔M 56〕が、第Ⅱ期のものとして採録してあるが、これは、フィーローズ期ではなく、トゥグルク末期の造営である。[80]

また、ガナーティー＝マスジッド形式の墓地が、このトゥグルク後期に始まったということも、デリー地域に残存する遺跡の形態・様式から明らかである。『デリー』第Ⅰ巻には、第Ⅱ期に属するものとして、〔G 1〕から〔G 11〕に至る十二件[81]を採録しておいたが、この数は、末期の造営と推定される〔G 12〕から〔G 72〕までの六十一件[82]の遺跡に比べると、約五分の一である。これらの墓地の中には、勿論、フィーローズ期に属するものもあると思われる。

さて、このように見てくると、さきに考えた、フィローズ期における大規模なモスクの造営数の増大と比例して、中小規模のモスクが造営されはじめ、その数も二十件を超える遺跡が今日まで残っている。ガナーティー＝マスジッ

ド形式の墓地も、少数ながら、トゥグルク中期に造営され始めているのである。そして、これらの建造物の造営の主体は、聖廟やハーンカーに付属して建てられたものを含めて、恐らくは、当時の権力者あるいは貴族に属する支配層にあると推定して差支えないと思われる。

このように、サルタナット中期、とくにスルターン＝フィーローズ＝シャーの治世以降に、このスルターンの個人的性格と、社会的、宗教的政策の結果見られた一種の宗教施設造営のブーム的現象として、支配層によって、様々な規模にわたるモスクが、フィーローズ支配下の貴族によって造営されたものと思われる。それは、サルタナット初期、あるいはトゥグルク前期の状況を著しく変えた新しい傾向と見ることが出来る。しかし、この建築史上きわめて重要で且つ興味ある事実は、スルターン＝フィーローズの公共社会政策と、彼個人の性格と嗜好とに多分に影響されたものであったことを、くり返して述べておきたい。しかしながら、その理由はどうあれ、この現象は、サルタナット末期の建造物造営の歴史にまで大きな影響を与えていったのである。

このような背景を考えながら、次に本稿の主要対象であるサルタナット末期とくにローディー朝時代のモスクについて、さきに述べた考察の結果を考えながら、本稿の視点に基づく結論を記してみよう。

サルタナット期における建造物の造営の歴史の中で、建設事業に熱意を示した支配者として、とくに二人のスルターンの名が挙げられる。言うまでもなく、フィーローズ＝シャー＝トゥグルクとスィカンダル＝シャー＝ローディーとである。

フィーローズ＝シャーについては上に述べたし、スルターン＝スィカンダルについても、前項に紹介したローディー朝時代造営の一部のモスクの刻文の中に、屢々、彼の名とその治世の年次が載せられていることを紹介したので、

その事実からも判るであろう。このことは、史書の記述の中からも少しく窺えるところである。スィカンダル＝シャーは、ローディー朝のフィーローズと言った観がある。

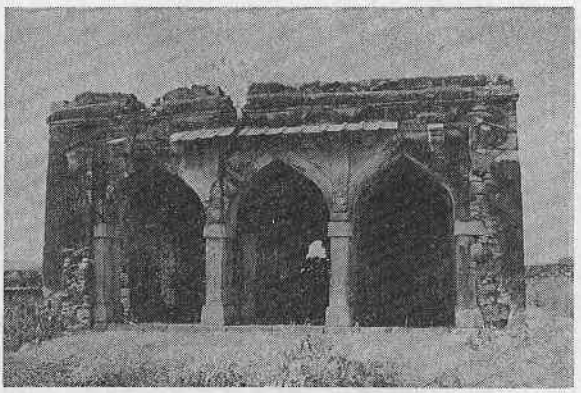
例えば、ローディー及びスール朝の歴史としての著名な『ダーウードの歴史』(*Tārīkh-e Dā'ūdī*) にも、「彼は、彼のあらゆる地方や領域内に、モスクを建てた」(ū dar jami' billād wa mamālik-e khud masjidhā banā nihād) と記し、そのモスクに、コーラン朗詠者やハーティブや掃除人 (makrī wa khatīb wa jārūb) を置いたと記している。[83] また、同書及びニァマットゥッラーの『アフガン人の歴史』(*Makhzan-e Afghānī*) には、例えば、「スルターンは、宮廷の寺院 (kanīsāī) を破壊して、そのあとにモスクを建てた」とか、「偶像寺院 (bud-khānah) を倒してそのあとにモスクを造った」といったような記述が見られるのである。このような、スィカンダル＝シャーについての文献の記述も、彼がモスクの造営に熱心だったことを証明している。[84]

それにしても、本稿の冒頭で説明したローディー朝時代のモスクの数の増大という事実は、スルターン＝スィカンダル＝シャーの建造物造営に対する個人的な嗜好からだけで説明してはならないように思われる。本稿で紹介した大型のモスクの中で、彼自身によって造営されたと思われるものは、刻文の中からは、一件も見当らない。僅かに、サイモン＝ディグビーのバハロール＝シャーの墓に関する新説が、バラー＝グンバッド＝マスジッド〔M 35〕をスルターンの墓所の巨大なコンプレックスの一部として推定しているだけであって(本稿二一―二三頁を参照)、それとても確証はないのである。

一般的に言えば、すでに本稿で紹介したように、スィカンダル＝シャー治世の年次やこのスルターンの名を載せた刻文を持つモスクの造営者は、何れも当時の有力貴族か支配層に属する者と推定され得るのである。刻文を残さない

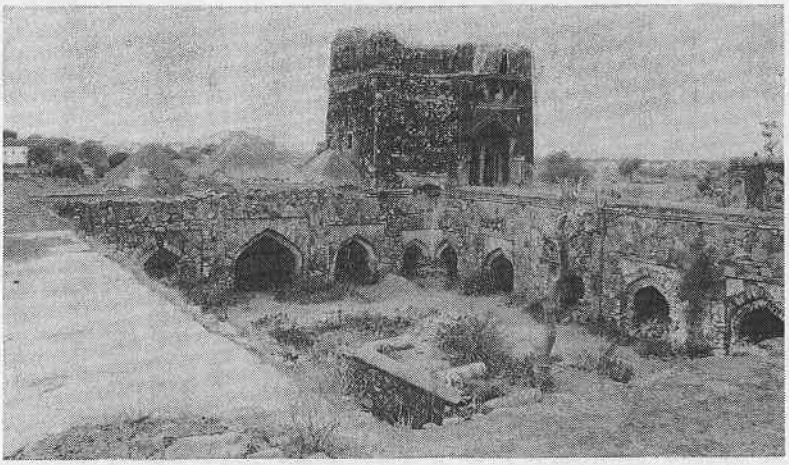
中、小のモスクは勿論、大規模なモスクについても、恐らくは、同じように、ローディー朝期の支配層が造営したものと考えてよいと思う。

たしかに、フィーローズ＝シャー治世のトゥグルク後期の状況に似て、スィカンダル時代にも、スルターンの個性と嗜好と、彼の社会的、宗教的政策の影響が、その配下の有力支配層や権力者をしてモスク造営に赴かしめたことを考える必要はあると思う。しかし、私は、すでに、ローディー朝期における墓建築の、異常とも言うべきその数との増加という現象の背後に、ローディー族を始めとするアフガン諸部族に見られた、トルコ系諸族の場合とは異なったアフガン独自の君主と貴族勢力との権力関係と、部族の自主独立的な意識構造を考えるべきだとする推説を公けにしてきた。モスクは、墓建築と違って公共的性格を持っているから、造営の数や規模において、墓建築とは異なるものがあることはすでに述べた通りである。そうした点を考慮すると、墓建築の場合ほどの激増とは言えないにしても、サルタナット末期とりわけローディー朝時代における中小規模のものを含めてのモスクの造営数の増大という現象の背後にも、私がさきの論考で指摘した如き、いわば権力関係に見られる特殊アフガン的な条件を考えることが出来ると思考するものである。



挿図 13.　サイイドゥル＝アジャーイブ西方のモスク〔M. 22〕。

最後に、本稿に関連して一つだけ触れておきたい問題がある。それ



挿図 14.　ベーガムプール東方のマハル〔O. 21〕。写真の向って左側の部分に三つのピラミッド型の屋根が見えるのが礼拝室。

は、サルタナット時代の建造物としては些か特異な構造を持つ構築物で、私たちが『デリー』の中で、「ベーガムプール東方のマハル」と呼んだ〔O 21〕特異な建造物である。[85] この遺跡は、今日見る限り、内庭を囲んで四方に部屋をめぐらす大きな建物で、その西側の中央部分には、ピラミッド型の屋根を頂く三つの部屋が残っているが、その内部の構造や方角からして、この部分が、あるいはモスクの役割を果していたものと推定され得るのである。

パースィー＝ブラウンは、かつて、その著『インド建築史・イスラム期篇』の中で、推定復原図まで付けて、この建造物をローディー朝時代の貴族の住居という推説を提示した。[86] これは、きわめて興味ある推説で、私もその可能性はあると思う。もっとも、私自身は、この建造物が、かつてハーンカーとして用いられたのではないかという推説をも提起している。[87]

ハーンカーであれば、モスクが付属して建てられているのは当然であろうが、建造物の総体の一部にモスクがあるのは、サルタナット時代の構築物としては全く珍らしい。パースィー＝ブラウンが考えたように、もしこれがローディー朝時代の貴族の邸宅で

あるとすれば、それ自体貴重な遺跡であると言えるが、さらに、その住居内にモスクに等しい礼拝所が設けられていること自体、きわめて興味あることと言わなければならない。問題は些か異なるが、ローディー朝のモスクについて考察する場合、一言触れておきたい建造物である。すなわち、この事柄自体が、サルタナット末期に、ハーンカーあるいは個人の住居に、小型のモスクとも言うべき礼拝施設が併造されていたという、モスクの変遷史上きわめて興味ある資料を提示しているのである。

1 山本達郎博士古稀記念『東南アジア・インドの社会と文化』一九八〇年一二月、山川出版社、上、五一—八四頁。

2 山本達郎・荒松雄・月輪時房、『デリー：デリー諸王朝時代の建造物の研究』、第I巻「遺跡総目録」、一〇—一一頁、四九頁を参照。

3 荒松雄、『インド史におけるイスラム聖廟—宗教権威と支配権力—』、東京大学出版会、一九七七年、五六三—五九五頁。

4 詳しくは、荒、「デリー現存の墓建築とローディー支配層」、前掲『東南アジア・インドの社会と文化』所収、六〇—六六頁。

5 『デリー』、I、四〇頁。

6 荒、前掲論文、六六—六七頁。

7 とくに、荒、同上、六七頁以下を参照。

8 荒、同上、七〇—七五頁参照。

9 "a sort of confederation of tribes", R. P. Tripathi, *Some Aspects of Muslim Administration*, Allahabad, 1936, p. 83.

10 *Ibid.*, p. 84.

11 Muhammad Abdur Rahim, *History of the Afghans in India, A. D. 1545–1631*. Karachi, 1961, p. 54.

12 A. B. Pandey, *The First Afghan Empire in India (1451–1526 A. D.)*, Calcutta, 1956, pp. 114–130.

13 R. P. Tripathi, *op. cit.*, p. 87.

14 『デリー』、I、六三頁。

15 荒、前掲論文、八〇頁。及び、同論文中の挿図五―七に紹介した巨大な墓建築の写真を参照されたい。

16 東大調査団でも、形態・構造等については山本・月輪両氏が担当した。本稿の私の解説は極めて簡単なもので私見の開陳のための最少限のものである。目下、月輪氏は「デリーにおけるモスクの形成と展開」という副題を付した次の三つの論文を発表している。「サルタナット初期のモスクにみられるスクリーン＝ウォールとイーワーン」、『東洋文化研究所紀要』、第八二冊、一九八〇年、一―七九頁。「サルタナット期モスクの周壁をもつ中央礼拝堂について」、前掲『東南アジア・インドの社会と文化』、上、一五七―一八三頁。「フィーローズ＝シャー＝トゥグルク時代におけるモスクの造営」、『東文研紀要』、第八五冊、一九八一年、四九―一二九頁。

従って、サルタナット末期に造営されにモスクについても、将来、形態・構造に関する精緻な研究を提示されることと期待している。また、東大史蹟調査団の報告書の第Ⅳ巻「モスク」を、目下、山本・月輪両氏と荒とで準備中なので、そこでも論及される筈であることを予告しておきたい。

17 『デリー』、I、五八頁、図版三八。Archaeological Survey of India, *List of Muhammadan and Hindu Monuments, Delli Province*. 4 volumes, Calcutta, 1916-1922, Vol. IV., No. 42. 以下、この四巻の報告書は ASI と略称する。

18 『デリー』、I、八一―八二頁、図版一〇〇。ASI., IV, No. 41.

19 『デリー』、I、五八頁、図版四〇。ASI., IV, No. 136.

20 『デリー』、I、五六頁、図版三一―三二a。ASI., IV, No. 135.

21 両者については、『デリー』、I、五六頁、挿図七・八を参照。

22 荒、「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」、『東文研紀要』、第三六冊、一九六五年、二六―二九頁。『デリー』、I、九五―九六頁、図版一二八。ASI., IV, No. 138.

23 『デリー』、I、五八―五九頁、図版四一・四二。ASI., II, No. 45.

24 Zafar Hasan, Inscriptions of Sikandar Shāh Lodi in Dehli, *Epigraphia Indo-Moslemica*, 1919–20, Calcutta, 1924, p. 2–3. ASI., III, No. 34,

25 『デリー』、I、七八頁、図版八九c・d。 ASI., II, No. 47.

26 Simon Digby, The Tomb of Buhlūl Lodi. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London*, Vol. XXXVIII, Pt. 3, 1975, pp. 550–561.

27 『デリー』、I、五九頁、図版四三—四四。 ASI., III, No. 301.

28 『デリー』、I、五八頁、図版三九。 ASI., III, No. 298.

29 『デリー』、I、八六頁、図版一一二a。 ASI., III, No. 299. なお、荒、『インド史におけるイスラム聖廟』、四五二頁、註（3）を参照。

30 荒、前掲書、四五〇—四五二頁。

31 『デリー』、I、五九頁、図版四五。 ASI., III, No. 279.

32 Zafar Hasan, op. cit., pp. 5–6, ASI., III. No. 279.

33 『デリー』、I、五九頁、図版四六。 ASI., III, No. 296.

34 『デリー』、I、六〇頁、図版四九d、挿図13。 ASI は、りの遺跡を載せていない。

35 『デリー』、I、六一頁、図版五一a。 ASI., III, No. 250.

36 『デリー』、I、五九—六〇頁、図版四七。 ASI., III, No. 164.

37 『デリー』、I、六〇—六一、挿図一四。 ASI., III, No. 278.

38 『デリー』、I、六一頁、図版五〇。 cf. ASI., III, No. 217.

39 『デリー』、I、六〇頁、図版四八。 ASI., IV, No. 36,

40 『デリー』、I、六〇頁、図版四九c・d。 ASI, II, No. 108; III, No. 91.

41 『デリー』、I、六一頁、図版五三a・b。 ASI., III, No. 26; IV, No. 122.

42 『デリー』、I、六一頁、図版五三c。ASI. は、この遺跡を採録していない。
43 『デリー』、I、六〇頁、図版四九a。ASI., III, No. 93.
44 『デリー』、I、六一頁、図版五一b。ASI., II, No. 307.
45 『デリー』、I、六一頁、図版五二a。ASI., III, No. 83.
46 『デリー』、I、六一頁、図版五二b。cf. ASI., III, No. 81.
47 『デリー』、I、六一頁、図版五二c。ASI., III, No. 81.
48 『デリー』、I、六一—六二頁、図版五四。ASI., III, No. 340.
49 Zafar Hasan, op. cit., pp. 9–10.
50 荒、前掲書、三四頁。『デリー』、I、二〇頁。
51 Zafar Hasan, op. cit., pp. 2–3.
52 A. Cunningham, Report of a tour in eastern Rajputana in 1882–3, *Archaeological Survey of India. Reports*, XX, 1885, p. 156. and Pl. XXXVII. Digby, op. cit., pp. 557–560. and Pls. III, IV.
53 ASI., III, No. 34.
54 Digby, op. cit., p. 558.
55 Ibid., p. 559, note 40. なお、ディグビー氏は、「デリー＝サルタナットの時代には、マスジッデ＝ジャーミ（Masjid-i jāmi' 'congregational mosque' は、時にはきわめて小さい建造物にも用いられている」として、"cf. the Kālū Masjid near Begampur" として、カールー＝サラーイーのモスク〔M 9〕（『デリー』、I、五四頁、図版二二）、ASI., III, No. 275.) を挙げている。しかし、月輪時房氏によれば、このモスクについては、「……崩壊の度が著しい遺跡である。今日では、礼拝堂の約 2/3 を残すのみであるが、かつては、奥行3間・間口7間の礼拝堂と、内庭の三方をとり囲む奥行1間の廻廊とが存在していて、やきに紹介した Kālān Masjid とほぼ同形式・同規模のものであったと推定される。」（月輪時房、「フィーローズ＝シャー＝トゥグルク時代におけるモスクの造営」、一〇一頁）ちなみに、月輪氏が挙げたカーラーン＝マスジッド〔M 8〕

（『デリー』、I、五三―五四頁、図版二一）は、高さ約八メートルの基壇の上に立つ、東西四一、五メートル、南北三三、五メートルの大規模な建造物である（月輪、前掲論文、九〇頁、および同頁の図七を参照）。もし、カールー＝サラーイ＝のモスクの規模が、本来、月輪氏の推定されるような大規模な構築物であるならば、ディグビー氏のジャーミ＝マスジッドの規模に関する例としては、適当ではないこととなる。

56 Digby, ibid., pp. 557–559.

57 C. A. Storey, *Persian Literature. A Bio-Bibliographical Survey*, Section II, Fasc. 3. London, 1939, pp. 454–56. 本稿では、ザファル＝ハサン編のデリー版本を用いた。*Khulāṣat al-Tawārīkh*, Persian ed., by M. Zafar Hasan, Delhi, 1918.

58 *Khulāṣat al-Tamārīkh*, p. 278.

59 Storey, *op. cit.*, p. 454.

60 Zafar Hasan, Inscriptions of Sikandar Shāh Lodī in Dehlī, pp. 5–6. ASI., III, pp. 161–162.

61 この名のあとに不明の部分があり、"Khwāja Muḥammad" の名が出てくる。Zafar Hasan, ibid., p. 7.

62 ASI., III, No, 91.

63 Zafar Hasan, ibid., pp. 9–10.

64 荒、『インド史におけるイスラム聖廟』、三九一―三九六頁および三五二―三五七頁。

65 中世インド関係の史書では、ジャーマ＝マスジッドは、マスジッデ＝ジャーミ masjid-e jāmi' あるいはマスジッデ＝ジャーミ masjid-e jami' と書かれているのが普通である。ウルドゥ語で書かれた後代の書物では、ジャーミ＝マスジッド、ジャーマ＝マスジッド jāmi masjid と出て来ることも多い。本稿では、これまでの私の論考で使っているように、今日、デリーのムスリムが一般に使っている「ジャーマ＝マスジッド」と聞える発音を、その儘、写すことにした。

66 クーワットゥル＝イスラーム＝マスジッド Qūwat al-Islām Masjid の名でも知られてきた。『デリー』、I、五一頁、図版一―一〇。ASI., III, Nos. 3, 4, 6, 7. J. A. Page, *A Guide to the Quṭb, Delhi*, Delhi, 1938.

67 『デリー』、I、五二頁、図版一二P、挿図1参照。cf. ASI., IV, No. 1.

68 月輪時房、前掲「フィーローズ＝シャー＝トゥグルク時代におけるモスクの造営」を参照。

69 荒、『インド史におけるイスラム聖廟』、二二〇—二二四、六五一—六五七頁参照。『デリー』、I、五二頁、図版一一—一二a。ASI., II, No. 20.

70 『デリー』、I、五二—五三頁。図版一三—一四。ASI., III, No. 270.

71 ジャマーアト＝ハーナ＝マスジッドは、初期の王朝の城市、ラーイー＝ピタウラー城砦（Qila'h-e Rāi Pithaurā）及びスィーリー Sīri 城砦とは離れた、シェイフ＝ニザームッディーンのハーンカーのあった場所（現在のニザームッディーン＝ウェスト Nizamuddin West）にあるが、これは、支配層の居住地として奴隷王朝末期から脚光を浴びてきたキーロークリー Kilūkhrī の近傍にあった。荒、前掲書、三一—三二、六二七—六二九、六五九頁を参照。

72 シャープル＝ジャート Shapur Jat のモスク〔M10〕は、今日では、外辺約一二メートルの中央礼拝室を残すのみだが、本来は大きな内庭を持つ巨大なモスクだったと推定される。その造営の時期は、恐らくは、トゥグルク朝前期か、あるいは本来はスィーリー城市が造営されたハルジー時代にまで遡るかも知れない。『デリー』、五四頁、図版二三。

73 月輪時房、前掲論文、五四—七九頁。荒、前掲書、三三頁。

74 月輪時房、前掲論文、七九—一二一頁。

75 Shams-e Sirāj 'Afīf, *Tārīkh-e Fīrūz Shāhī*, Bibliotheca Indica, Calcutta, 1890, p. 135. 月輪、前掲論文、七九頁以下を参照。

76 月輪氏は、この八つのモスクを、現存する遺跡と照合して、三つを比定しており、二つの現存遺跡を有力候補に挙げている。前掲論文、七九—一〇二頁参照。

77 Futūḥāt-e Fīrūz Shāhī, Pereian edition by N. B. Roy, *Journal of the Royal Asiatic Society of Bengal*, Letters, Vol. VII, 1941, No. 1, p. 79.

78 Shams-e Sirāj 'Afīf, *op. cit.*, (Persian edition) p. 330.

79 『デリー』、I、五四—五八頁、図版二四—三七を参照。なお、この場合、第II期に分類しているが、その大半は、スルターン＝フィーローズ＝シャー以降の造営と考えられる。ASIの参照番号は省略する。

80 『デリー』、I、六二頁、図版五五。このイードガーには、南端の塔の東面に、八〇七AH年（一五〇四年）の年次と、当時のデリーの権力者だったマッルー＝イクバール＝ハーン Malik Iqbal Khān の名を載せた刻文が残っている。ASI., III, No. 287.

81 『デリー』、I、六四—六五頁、図版五六—五八、及び挿図二〇・二一等を参照。

82 『デリー』、I、六五—七〇頁、図版五九—七二、及び挿図二二—二八等を参照。

83 'Abd Alla, *Tārīkh-e Dāūdi*, Persian text ed. by Shaikh Abdur Rashid, Aligarh, 1954, p. 32.

84 *Ibid.*, p. 60, p. 61. Niamatullah's *History of the Afghans*, Part I, Lodi Period, translated with varions notes by Nirodbhusan Roy, Santiniketan, 1958, p. 83, p. 86, p. 88.

85 『デリー』、I、一〇六頁、図版一五四aを参照。

86 Percy Brown, *Indian Architechure* (*Islamic Period*), Third ed., 1942. Plate. XIII.

87 荒、『インド史におけるイスラム聖廟』、四九一—四九三頁。